

寂しい夜



その夜、どうしても寂しくてたまらなくなってきた僕は、もう夜中の三時半を過ぎているというのに、外に出たのだった。けれど、そこには誰もいなくてただ外套だけが灯っていて、寂しさは変わらなかった。コンビニにでも行けば少なくとも店員はいるだろうけれど、ここからコンビニまでは、とても遠い。

どうしようかと迷ってから、僕は公園までぶらぶらと歩くことにした。部屋に戻るよりは、その方がましな気がしたからだ。それに、歩いていれば、誰かにすれ違うかもしれない。

しかしたった一人で歩いていると、よけいに寂しくなってきた。なんだかとっても孤独を感じた。僕は一人で生きている、そして他の人は、きっと誰かと一緒に生きている。そんなふうを感じた。

結局、公園に着くまで誰にもすれ違わなかった。これ以上外にいるのが辛くなって、僕は部屋に戻ろうと思った。と、その時、今日は寂しい夜ですね、という声が聞こえた。振り返ると、公園のベンチに見知らぬ紳士が座っていた。

やっと僕は、仲間を見つけたと思った。きっとあの人も寂しいんだ。だから僕は、そうですね、と声をかけながら公園に入った。そしてぼんやりと空を見上げているその紳士の隣に座りながら、さらに続けた。

「なんだか今日は、寂しくて寂しくて、たまらないんですよ。特に何かが起こったわけでもないのに」

すると紳士は、僕を見てにっこりと微笑んで、それはそうでしょう、と言った。

「今日は、寂しい夜の日なのですから」

そして紳士は、感じない人も多いのですけどね、と言いながら僕に、なんだか専門的な本を開いて見せてくれた。それによると次の寂しい夜の日は九日後、ちなみに明日は胸騒ぎのする夜の日、らしい。そんなものなんですね、と僕が言うと、その人は空を見上げながら、そんなものですよ、と言った。